

世俗的な権威や利害関係とは切り離されたライフワークに勤しみ、
「ガラクタ」に蕩尽する趣味家の酔狂さを共有し合うミニコミ的媒体は、
「瞳に見へぬ趣味の縁の糸」で“おいら”たちを太く、強く、結びつけた。
期せずして、こうして紡がれた繋がりが大学制度の外部で形づくられ
市井の「図書館」や「アカデミー」の役割を果たした!!

書誌・出版史・書物メディア史のシリーズ *文圃文献類従84*

斎藤昌三編集『おいら』→『いもづる』 —郷土研究的趣味雑誌の1920～1941年—

全三巻・別巻
〔復刻版〕

監修・解題—大尾 侑子（桃山学院大学）
推 薦—佐藤 健二（東京大学）
資 料 提 供—国立国会図書館ほか
造 本—A5・並製・総約1,040頁
揃 価—48,000円（配本毎・別冊分売可）



「おいら」のペンター

解題もくじ

- 一、はじめに
- 二、『斎藤昌三編集『おいら』→『いもづる』
—郷土研究的趣味雑誌の1920～1941年—収録資料について
斎藤昌三という「中心」とその周辺
- 三、郷土研究雑誌『おいら』の誕生
趣味家と趣味雑誌の時代に／生粋の浜っ子・加山道之助
- 四、後継誌『いもづる』の刊行
『いもづる』の発行／男女の仲より堅い絆と「研究」／
趣味を通じた卓越化
- 五、趣味にとって「研究」は必要か？
三田平凡寺と「我楽他宗」／教養をベースとした遊び／
軟派出版界にも重なる「趣味的研究」の裾野
- 六、おわりに——本書の活用法に代えて

【第一回配本】2022年2月 配本揃価22,000円 ISBN978-4-910363-61-5

第一巻（364頁）
・『おいら』創刊号～11度目戊午2号（横浜郷土社、1920年2月～1922年12月）
別巻（150頁） 定価4,000円 ISBN978-4-910363-63-9
・『はだかの昌三』
* 解題、総目次

【第二回配本】2022年8月 配本揃価26,000円 ISBN978-4-910363-62-2

第二巻（228頁）
・『いもづる』（いもづる社）1集～4巻5号（1923年9月～1926年12月）
第三巻（296頁）
・『いもづる』（いもづる社等）5巻1号～10巻1号（1927年5月～1941年11月）

本書解題者による関連出版ご案内

大尾 侑子 編・解題
粹古堂・伊藤竹酔
—昭和前期の軟派出版と古書事業—
【全3巻＋別冊】
A5横／B6／B6横判 総652頁 ￥46,000

大尾 侑子 編・解題
性・風俗・軟派出版
パンフレット集成
—エログロナンセンスの尖端—
【全2巻】A5判 総598頁 ￥38,000

大尾 侑子 編・解題
カストリ雑誌考【完全版】
【全1巻＋別巻】A5判 総352頁 ￥20,000

金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884 Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください

図版はすべて本書より
価格は税別 053/02/4000



大正期より昭和戦時期まで、
リトルマガジンを媒介にした趣味人たちのネットワーク。

「趣味的研究」の系譜をたどるところみ。

金沢文圃閣

文圃文献類従84

監修・解題—大尾 侑子 推薦—佐藤 健二

斎藤昌三編集

『おいら』→『いもづる』

—郷土研究的趣味雑誌の1920～1941年—

全三巻・別巻

佐藤 健二(さとう けんじ／東京大学)

る』第一輯に掲げられた「いもづる由来」である。「各自異なった生活は送りながらも、帰するところは同じ趣味海に落ちあう同志、いわず語らず、いつか同気を求めて集まったもの」とその由来をなぞりつつ、「各個性を尊重し、あい援けながら、趣味界に対する赤化運動も勝手、保守主義も自由に、不真面目な趣味界に研究の伴わぬ趣味界に、多少でも幾分の刺激と反響を与えてゆこうと期する」との抱負を掲げる。改巻第四輯の巻頭言は、いまの蒐集趣味家が社会と没交渉で、井の中の蛙の偏狭な唯我独尊が多いのを嘆き、「よろしく自己の趣味なり研究なり蒐集なりを世間に発表して、不足不及は遠慮なく問うべし、誤れるものは正すべきである」と檄す。こうした「研究」への志は、のちに鹿野政直『近代日本の民間学』(岩波新書、1983)が鍛えあげていく「民間学」の概念の裾野の拡がりとも重なりあうように思う。

しかし、その流れはいまだ地下にひそむ伏流の浸みだしに留まり、水脈の網の目は概略の地図にすら描かれていない。そのわずかな露頭にしてみただただ物珍しく、あるいは人形や郷土玩具などの土俗への偏愛が目立ったり、ときに色好みや性愛信仰とかかわってことさら密かに猥奇的に受けとめられたり、また取るに足らない下手物・些事小事への執着であると決めつけられたりしたために、日常の事物を通じて自らの生活を考えようとする「民間学」の本願に結びつけることはむずかしかった。残念ながら、そのさびしい状況はいまも大きくは変わってはいない。むしろ、先達たちの無名への埋没は時とともに深くなるばかりである。

であればこそ、古書業界の善知識たちの協力を得た山口昌男の回峰行「知の自由人」の山脈縦走の駆け足にとどまることなく、水脈の丹念な測量とその組織的な共有があらためて必要であろう。神話のように語られている三田林蔵(平凡寺)の我楽多宗にしても、その趣味煩惱の毀譽褒貶のあれこれを論ずる前に、まずこの宗門の勤行の実態が掘り起こされなければならない。斎藤昌三とも明治文化研究会で接点のあった石井研堂の『明治事物起原』(改訂増訂版、春陽堂、1944)の達成が、彼の個人誌『こじき囊』(明治24年9月創刊)における「近世庶物起原」の詮索から始まったことなど、私としては忘れたくない縁起であるけれども、その何年か後に始まった『集古会誌』(明治29年11月創刊)の集まりほどにも見つめられていない。こうした「民間学」としての考証の実践のつながりを考証しようとする作業は、紙に印刷された雑誌がメディアとしてあった時代の、可能性の水脈を描きなおすことになるだろう。

今回の復刻が、その最初のボーリング調査となることを期待する。

「民間学」の水脈に向けたボーリング調査

もう40年も前、「十二階」の喜多川周之さんが、自分が知る趣味家たちのことをいつかまとめて話しておきたいね、と呟いたことがあった。「星座みたいな集まりがたくさんあって、生まれたり壊れたり、それぞれに輝いていた。懐かしいね。きっと『義士銘々伝』になるよ』といった。あれは、内田魯庵の『きのふけふ』(博文館、1916)をお借りして読んだときだっただろうか。残念なことに、まもなく入院され、おそらく縦横にからみあって意外なつながりを浮かびあがらせたであろう、そのお話をうかがう時間をもてなかった。平井通(壺中庵)、磯部鎮雄、斎藤正一(夜居)、長尾桃郎、伊藤敬次郎(竹酔)、伊藤喜久男、高橋邦太郎、磯ヶ谷紫紅、伊志井寛、梅原北明、本山豊治(桂川)、花咲一男、池田信一(文痴庵)、中山栄之輔……、いまはほとんど忘れられてしまった名前だけが、断片的に孤立したまま、当時の雑談の貧しいメモに残っているのがさびしい。

斎藤昌三の名も、いつ知ったのか。凝りに凝った装丁の本を、いろいろと見せてもらったついでだろう。喜多川さんより二回りばかり年上の、「愛書家」として有名人だったというが、その時の説明の中心は、淡島寒月の『梵雲庵雑話』(書物展望社、1933)の表紙の草双紙の袋を一冊ごとに変えた趣向の珍しさだった。その出版社が柳田国男の『退読書歴』(書物展望社、1933)の版元であることにはやがて気づくのだが、『愛書趣味』(大正14年創刊)や『書物展望』(昭和6年創刊)などの、斎藤の雑誌を通じた書誌の実践の並々ならぬ積み重ねに出会うのは、もうすこし後になってからである。

今回の復刻が、私がまったく覗いたことがない『おいら』(大正9年2月創刊)、全部で幾冊・何頁になるのかよくわからない『いもづる』(大正12年8月創刊)という斎藤の個人雑誌(本当は名前だけしか聞いたことがない『樹海』『黒船』『郷土へ』なども見たかったのだが)に光を当てて、その存在形態を浮かびあがらせてくれるのはまことにありがたい。『おいら』が刺激となって、芦田安一(止水)の雑誌『和多久志』(大正9年11月創刊)が生まれたという話をどこかで読んだが、趣味という新語を縁にさまざまところで簇生し、いつのまにか見えなくなってしまった、多種多様な「個人誌」があった。こうした人びとの雑誌・書物づくりへの情熱をさかのぼっていくと、江戸の風流人たちが、俳句や川柳に興じ、表紙に贅をこらした刷り物などをつくっていた熱中につながるのかもしれない。

『おいら』の創刊号の挨拶は、この雑誌が自分の「貧弱な趣味生活や、それらの記録の報告で、いわば吾等と交友間の一種の私信」であると、やや控えめにその占める位置を打ち出している。そうした私信がさらにつながりあっていくことへの期待を強めたかのように響くのが、後続の『いもづ

満洲郷玩行脚

須知善一

満洲國が鳴物入で宣傳に大重となつた娘々祭は郷土玩具を蒐集する絶好の機會であるが、俗事に妨げられて娘々祭隨一の大理石橋行を逸したので廿日夜大連發奉天下車、先づ圓平盟兄に敬意を表し翌廿二日大屯驛下車、祭日に限つて運行する輕油動車にて

驛より二キロの慶雲山麓の假驛下車、參詣の満洲國人に押されて廟に詣る。廟後の穀物倉は面白い建築がしてある。寺は奉納の額の年號等から見て先づ三百年位經たものと思はれる。澤山の露店の中に起上りを賣る店一つと土偶を賣る店二つあり起上りは新京附近のもので虎、桃、ザクロを抱くものも多く、起上りのおもりの格向が内地のもの等とうんと變つて原始的とも云はふか、土偶は各地のものと大同小異

なるもホコリにまみれたもの、全く稚拙其ものゝ高麗ものがあつた。一近だと云つた。別にふべきものもあつたが見出せないが郷玩と云ふ發見でもない。デツと一時間ばかり傍に佇んで人が買つて行く有様を見てゐたが、起上りと木製槍人形は立止つて素やかすもあるが



大尾 侑子(おおび ゆうこ／桃山学院大学准教授)

本書は「書痴(ビブリオフィル)」として知られる、“少雨莊”こと斎藤昌三(1887-1961)編集のもとに発行された無料の郷土研究/趣味誌『おいら』(1920.2～1922.12)、およびその後継誌『いもづる』(1923.9～1941.11)に、小冊子『はだかの昌三』(坂本篤編、有光書房、1962年)を併せて復刻刊行したものである。

いまなお多くの愛書家に親しまれる斎藤昌三については、少なくない記録が残されており、その経歴の一部としてこれらの媒体が触れられることも珍しくない。

両誌は古書市場でも入手が難しく、未だ復刻されていないこともあって、現物の参照は容易ではなかった。国会図書館の蔵書も「別室閲覧」「禁複写資料」扱いのため、手に取ることはできても一言一句を仔細に検討することはできない。こうしたアクセスの限定性もあってか、大正期～昭和初期の郷土研究、「趣味人」「趣味家」研究には一定の蓄積がある一方で、これらを主軸とした学術研究はほぼ存在しない状況にある。

筆者自身も『おいら』『いもづる』とは縁がなく、その入手が叶わないまま10年ほどが過ぎた。今回、復刻刊行が実現したことは一古本好きとしても、また当時の「趣味的研究」の系譜に歴史社会学的な関心を持つ者としても、喜ばしい。

「趣味」は、モノを蒐集するコレクト行為や、対象を掘り下げ、批評する行為、コミュニティ形成の欲望が複雑に絡み合うなかに立ち現れるものである。その点から言えば、彼らの営みと現代人の営みは地続きであり、決して遠い過去のものではない。

「趣味に研究は必要」という立場は、こうして次第に裾野を広げ、郷土趣味、愛書趣味、猥奇趣味などそれぞれが有機的に結びつきながら、官学アカデミズムの外側で「趣味—研究」を往還する市井のアカデミズム的空間を形成することとなった。

斎藤昌三を中心とする『おいら』『いもづる』は大正期～戦前昭和の「趣味人」の生き様を肌で感じ、彼らがつむいだ絆を—芋づる式—にたどるためには、珠玉の対象であることは間違いない。有用性という基準を度外し、趣向を凝らした紙のうえで遊び倒すその「道楽」に、彼ら(／彼女ら)は魅了された。

大震災に一番初めの救護品は
なにかまた何が最初に賣れたか。

菊池山

多くの人の知らないエピソードと言つて、よるとナンセンスものであり、と言つて矢張りかへ記して残して置きたい一幕物であるが、茅ヶ崎のおん大が何か書けと云ふから、幸へづ、へ残して置いて貰いたい。

其當時私は市役所の公園に勤めて居つた。時五十八分最初のグーラグラは只恐ろしい、なるかア不安で、何が何んだか解らなかつたが五分と経たずやつて來た二度目のグーラグラは九ノ内三菱銀行のあの建物が上部で三ノ内金西に動いて、今度は窓から潰れるか今度は傾れるかと眺めて居つたが……勿論私達は立つて居られないから大地へ腰を落して、青くなつて眺めて居つた——何んともなかつた。直ぐ前の府廳の

本書は「書痴(ビブリオフィル)」として知られる、“少雨莊”こと斎藤昌三(1887-1961)編集のもとに発行された郷土研究/趣味誌『おいら』(1920.2～1922.12)、およびその後継誌『いもづる』(1923.9～1941.11)に、小冊子『はだかの昌三』(坂本篤編、有光書房、1962)を併せて復刻刊行。

世超 超人非超人略傳(其二)

▽稻垣豆人

舊姓松原安治郎、後安郎と改む。清和源氏の末流として、明治本町に生る。現住所、岡崎市康生町。

血氣壯年の頃は九州より琉球、臺灣、南洋、マニラと放浪、脚に努む。後郡書記より新聞記者となり、岡崎の瓦斯會社創立整然たる岡崎趣味會は最も君の力に負ふ所、今やその運動は市井としてある。

▽青山督太郎

蒐集の主なるものは土俗品、繪馬。研究は性的神の探訪にある。明治三十一年三月、大阪島内に生る。住所大阪市南區長堀橋の長男。酒も煙草も女も縁のない方。それでも妻君も子供もあ研究としては筆端文學と、廣告とする意匠印刷物。

蒐集は美術上の裸体繪畫及び、繪葉書としやれた名勝はがき。趣味は只旅行と洋食のみ。

▽小西一四三

本名石藏。明治十八年十月、徳島市西新町の産。七赤、金性。去に苦勞嘶もあるらしいが、未だ調べてない。

現住所、京都市新道通り佛光寺南壬生松原町二。

酒

池

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お

主

は

本

集

の

お